

教え子として、いま思うこと—第2編の結びにかえて

追悼集第2編は猛暑の頃に45編の寄稿が集まりました。編集委員会メンバーは、そのひとつひとつを読みながら、石田先生がまるでその場におられるかのような思いにかられました。

石田先生は、仕事中でも私の目の前に現れ、次々出題されていくのです。東京都が不燃化特区の「特定整備路線」として事業化した都市計画道路が通る市街地を、若手職員たちと歩いた時も、先生が現れ出題されました。「都市の縮退の時代に、住宅地を貫通する都市計画道路を新設、整備を行う意義を述べよ」。すると、土木職の新人職員の一言、「こんな住宅地に都市計画道路を通すんだ、と思いました」。これにどう答えるか、石田先生に試験をされているようで戦々恐々です。しかし、密集市街地に今必要な都市計画道路はどんな空間なのだろうか？彼らと一緒に考え議論するのは楽しみなことでもあります。

先生の著書を改めて読み直し、気づかされたこともあります。

過去の法制度などの検討過程の中で、問題意識に上り検討されても日の目を見ず、切り捨てられてしまったものがあります。市街地建築物法の道路関係規定などはその一例ですが、100年近い時を経た今、建築物と道路の関係など、建築を通じて都市を誘導する「きめ細やか」なしくみづくりは依然として課題です。現代の課題の中には、切り捨てられた当時の人々の思いが生き続けています。その思いを掘り起こし、拾い上げることが歴史に学ぶということではないかと思っています。

私は区役所に勤めて33年になります。石田先生から「まちづくりをやるなら基礎自治体へ」と言われた記憶があります。石田先生の師である高山英華も学生に「自治体に行け、面白いぞ」と言い、都市計画は自治体の仕事とすべく新都市計画法の制定に尽力するとともに、東大都市工学科設立の目的の一つとして「都市計画を行える自治体職員の輩出を考えていたのであろう」と『東京の都市計画家 高山英華』（東秀紀）にあります。

高山英華がイメージした都市計画を担う自治体職員と私たちの姿はどこまで重なるかわかりませんが、自治体での街づくりの仕事は常に住民とのかかわりの中にあります。自治体職員と住民の関係性は「ともに育つ」関係だと私は考えています。どちらもが、歴史を知り地域に愛着をもつ。現実を正しく理解する。お互いの立場や考え方の違いを理解する。そして、お互いがよりよいものを目指して努力し、合意に近づいていく。「住民は未来を創る主役になる」地道で長い道のりです。

学生時代は授業をさぼってばかりの不肖の弟子ですが、今、学生時代より密度濃く石田先生とお付き合いしている気がします。

教えるとは希望を語ること。学ぶとは誠実を胸にきぎむこと。(ルイ・アラゴン「ストラスブール大学の歌」大島博光訳より)

石田先生は、揺るぎない希望を手渡してくださいました。

2016年10月

TMU都市と住宅を考える会副代表 重永 真理子



まち歩き 清瀬・滝山
(2005年10月15日)



石田先生を囲む会
(左：2006年9月30日、右：2008年9月7日)



「2004年度日本建築学会大賞」受賞
記念講演・祝う会
(2004年7月3日)